

研究

佐伯方言雑話 (二)

賛助会員 山内武 麟

おらぶ

おらぶは、物類称呼に、四国・九州の方言であると書いてある。九州では現在なお使われていて、大声で叫んだり、呼んだりするのがおらぶで、九州人の気性をあらわす言葉の一つである。どなる、がなるということばもあるが、こんな言葉は、荒々しく、怒りがこもっているように聞こえるが、おらぶは陽性を響きを感じ、明けたようなしなやかな感じが聞こえてくるようだ。それもその筈、この言葉は古語で、上代人の言葉がそのままの形で残り、九州人は所かまわず大声を上げて、おらぶをたぐひつてゐる。

おろし

おろしとは、渡し舟のことで、おろし舟ともいい、佐伯地方だけの方言である。國木田独歩の名作「源おぢ」に、次のような一節がある。

その頃渡し船を業とすもの多きうちにも、源が名は浦々にまで聞えし。それ心たしかに俠氣ある若者……

この文中の渡し船におろしを振仮名をつけてある。昔、葛巻には、この源おぢのように、おろしを事業に

する人が幾人かいて、大入島や八幡・上浦方面、遠くは中浦方面に帰る人たちが、この人たちが渡してもらっていた。

また、小説「源おぢ」には

山村水廊の民、河より海より小舟泛べて城下に用を便ずるが佐伯近在の習慣なれば番匠川の河岸には何時も渡し船集ひて乗るもの下るもの、浦人は歌ひ山人風のしり、最と賑々敷けれど……

とあるように、毎朝、佐伯湾の各浦々から佐伯のまちに用足しに出る人も、所へ運ぶ荷物を積んで、町までくる舟が出た。これもおろしという。各浦々の名前でよんで、松浦おろし、鯨浦おろし、浅海井おろし、荒塩おろしといい、池船橋や太平橋(今はない)などのたもとに集って大賑わいを呈していた。これは又、今運輸しているボンボシ船ではなく、櫓で漕ぐ小船であった。

このおろしで、忘れられないのが木立おろしである。今は立派な道路に改修されてバスが通り、この姿は全くなくなつたが、昔、木立の角道から浜所岸まで通つたのが木立おろしであった。夕陽が西に沈むころ、赤く深まつた空にくつきりと浮かぶ城山、全貌を川面に写して葉の形をつくる煙草山、夕霧の中の水鳥渡かぶど、川の川源など、木立おろしのゆるやかな櫓の音を聴きながら眺めたこの光景は、天下の絶景といつても決して過言ではなかつた。

かぶる

かぶるという方言は、全国の東北から九州まであちこちで使われているが、所によつて色々という意味が違う。

東海・近畿では、かじる、噛みつくの意に使うらしいが、私どもは、かじることは「こぶる」という。「鼠が

「こぶる」「餽王をこぶる」など、普通にはいう言葉である。罰があたることを「罰をかぶる」と、他人の罪に連座して「ひとの罪をかぶった」というし、「私がかぶります」と責任を負う意味にも使う。また「湯をかぶる」「水をかぶる」といって、浴びる意味にも使う。

### ぎつくり

「しやつくりのことをぎつくりという。大分県・長崎県の方言である。念入りにぎつくりしやつくりという時もある。

「しやつくりがつくと、「ぎつくりがついた」といって、すや水を飲ませる。また、後から「わつ」と大声でたまがらせる（九州方言で驚かせるの意）と、びつくりした柏子にしやつくりがとまることがある。赤ん坊に「いつた時は、何のまじないか知らないが、頭の血に息を吹っかける。」

「しやつくりは、横隔膜が不時の収縮によって、空気が急に吸込まれる時に発する奇声である。その声が「しやつくり」と聞こえるからしやつくりといひ、また「ぎつくり」とも聞こえるのでぎつくりの名が出たのであろう。大人にはめつたにつかないが、こどもにはつき易い。殊に赤ん坊にはよくつくようである。

ちぢんに「ぎつくり」を辞書で引いて見たら、

(1) 弱点などいいおてられて、どきりと驚くさま。

(2) 大目でごつとにらむさま。とあった。

### ぐつ

「ぐつは、具合・都合・あんばいの意味で、関西・四国地方の方言であるが、私どももよく使う言葉である。」

「ぐつがよい」「ぐつが悪い」「ぐつがきれん」などいう。「ぐつがよい」は、具合がよい意味で、機械などが調子よく動くこと「なかなかがぐつがよい」というし、「今日はだいたいぶんぐつがよい」と病人の加減のよい時という。具合がよくない、都合の悪い時は「ぐつが悪い」という。着物を右前下りに着たり、着方が悪くてたぐれたりすると、「着ぐつがわるい」というし、「今日は親父が家にいるからぐつが悪い」という時のぐつは、都合を意味する。

「食べぐつ、飲みぐつ、読みぐつ、話しぐつ、見ぐつ、聞きぐつ、寝ぐつなど、動詞の連用形にぐつをつけて、具合、都合、あんばいの意味をおらわしている。

「ぐつがきれん」とは、はきはきしない、優柔不断の意である。「あの男はぐつがきれん男じや」「ぐつがきれんけえ、もうおいそがつきた」など、よく聞く言葉である。

また、ぐつにゆうという言葉もある。決断力のない者、ぐずな人をいう。「彼はぐつにゆうで何一つ出来る男ぢやない」という。

### けたいぐそ

「縁起があるい」のを「けたいぐそが悪い」という。けたいぐそはをけたぐそというところもあるし、けたいぐそという起もある。そしてこの言葉は、縁起の悪い時に限って使う言葉で、よい時に「けたいぐそがよい」とは言わない。

このけたいぐそはけたいにくそをつけたものだ。くそは糞で、「下手くそ」というように、ある言葉に添えて罵る意を表わす接尾辞である。けたいを悪しがまに言った言葉であるに間違いない。

けたいを辞書でみると、怪体、卦体、希代（稀代）の三つがある。怪体には、さい先、縁起、の意があり、卦体は、占いをして卦に現われた形、縁起、さいさきの意であり、希代、稀代は、世にまれなこと、たぐい少いと、奇妙、不思議の意がある。

こうしてみると、けたいくそのけたいは、怪体でも卦体でもよいわけである。

こつてえうし

牡牛のことをこつてえうしという。いかにも強そうに聞こえる言葉である。力の強い屈強な男を「こつてえうしのような男」という。

このこつてえうしは、略してこつてともいうが、これは古語のこと、ひが軽じたのである。ことひは、特負、特牛と書いて、ことひうしの略である。ことひうしは、こた負ひうしの略といわれている。ことひかうしとも言つて、頑強な牛、重荷を負う牛の意である。万葉集の中にこのことひかうしを詠んだ歌に、次のようなものがある。

吾妹が頼に生ふるすごろくのことひのうしのくら  
（万葉集卷十六）

また、ことひうしは、強健な牡牛が粗米を負つて叱咤に運ぶことから、みゆけ（三宅）にかかると枕詞として使われていた。万葉集卷九に

ことひうしの三宅の埜に指ふ鹿島の埜に……  
 とうたわれている。

さかしい

さかしいという言葉は、色々な意味に使われている。年寄の挨拶ことばに、「どうな、さかしいな」「ああ、さかしくうしとるぞ」と言い交しているのを聞くことが

ある。このさかしいは、健やか、健康、を意味する。「あの女は口がさかしい」というさかしいは、よくしやべる、口先が上手であるの意味であり、「彼はこざかしい男じや」と、さかしいにこをつけると、小賢しいと書いて、利口ぶる、生意気だの意味となる。

さかしいは賢しと書き、古語のさかしの口語である。さかいは賢しと書き、次の六つの意がある。

- (1) かしこい。才智がある。聡明だ。
- (2) よい。すぐれている。
- (3) 気が強い。しつかりしている。気丈である。
- (4) 生意気である。さしでがましい。こざかしい。
- (5) 盛んである。栄えている。
- (6) 丈夫だ。達者だ。

さかしいも古語の名残りをとどめる言葉の一つである。さかしく大切にしよう。

しばなえる

草花に水がかれて、しおれてしまうのをしばなえるという。草花だけでなく、気力を失ってしおれかえっている人に、「何をそんなにしばなえているんか。元気を吐せ」と励まし言葉をかける。

しばなえるはしばむとなえるとを重ねた言葉である。ういほむだけで十分意味が通じるのに、なえむをつける。全く生氣を失い魂が抜けてしまったように聞こえる。

佐伯方言で、全く気力を失ってしまっている状態を、なえこむという。

しやちばる

出しやばつてお節介を焼くことをしやちばるといい、しやちばるものを、しやちばり、むかまたはおしやちと言

う。「しやちばるな」と叱つたり、「この娘はおしやち  
で困つたまのじぬ」と嘆くのを聞く。おまに女や子供に  
対するたしなめの言葉か、非難する時に使われる言葉で  
ある。

辞書を見ると、しやちばるは籠張ると書き、しやちば  
るはると同じ意味であると出ている。その意味は、籠  
しやちばるのようなおおごりな構えをする。緊張してか  
たくなる。自由に屈伸ができぬようになる、とある。こ  
んな意味の場合には、私どもはしやちばるのばを抜  
いて、しやちこばるといふ。緊張し過ぎてこちごちにか  
たくなつた滑稽な姿をしやちこばるといふ。

しやちとはしやちばるの略で、これは想像上の海獣で、  
体は魚形、頭は虎のよう、背の上に鋭い刺をもつてゐる。  
名古屋城の金の籠はおまりにも有名であるが、屋根の棟  
飾りに使い、その顔その恰好ビューモアなつぶりな代物  
である。

しやちを促音化してしやちつちといふ言葉がある。是非  
とも、必ず、無理でその意味である。無理を押し通す意  
志があらわれ、しやちに通ずるものがある。

### ずつねえ

「そんな話しを聞くと、聞く方がずつねえかう。」この  
言葉の中に出るずつねえはずつねえの訛つたもので、せ  
ない、苦しい、つらいの意である。狭い所に長く居て出  
て来た時「あおずつなかつた」といふずつないは、窮屈  
であるの意である。

このずつないはじかつかない(術無い)の転じたもので、  
なすべき方法がない、処置ない、辛抱できぬ、苦しい、  
切ない、つらいの意である。近松門左衛門の浄瑠璃「女  
殺し油地獄」の中に「あお、じかつかない母様母様、かか

さまはまだ帰らずかと……」とある。

### せびる

せびるは、ものを貰うとき、せがんだり、ねだつたり  
することである。

せがむは、無理に頼む、ねだる、強請するの意であり、  
ねだるは強請ると書き、無理に甘えて請う、押し請求  
する、ゆするの意である。

せびるもせがむ、ねだると同じ意味であるが、私ども  
が日頃使っているせびるはそれ程まで強い意味ではない。  
こども同志で物をせびり合っている風景は、微笑ましい  
ものである。

### そばえ

朝から晴れたり曇つたりしていた天候が、急に暗くな  
つて、しぐれが音をたてて降り出した。

空を見上げて雲行きを見ていたお年寄が「そばえ、風  
ちや」と言つた。しばらくしてお年寄の言つた通り、明  
るくなつてそばえは通りすぎ、青空が見えて強い西寄り  
の風が吹き出した。

そばえは、中国・四国・九州の方言で、おらしぐれ、  
夕立、小雨のことをいい、そばえが降ることをそばえ、  
といふ。

そばえを辞書で見ると、戯と書き、ふざけること、甘  
えること、狂い騒ぐこととあり、また通り雨、日照り雨  
の意がある。

(つづく)

ふるさとの なまりなつかし

停車場の 人ごみのなかに

そを聞きにゆく

へ石川歌木